

忠実なしもべを目標して

(マタイ24・45～51)

一、主は何を語られたのか

45節をご覧ください。《ですから、主人によってその家のしもべたちの上に任命され、食事時に彼らに食事を与える、忠実で賢いしもべとはいったいだれでしょう。》と主は語られました。この聖句だけを見ますと、主イエスが何をおっしゃっているのか、良く分からなと思います。前後関係から見ると、主は、やがて到来する主の日である、再臨のことを語っておられることが分かります。この、主イエスのことばを真剣に聞いたのは弟子たちであり、そして福音書が発行された時のマタイが所属していた教会です。さらに、主イエスが語られた強調点は、日本語の聖句ですとまったく順序が逆になってしまっていますが、《忠実で賢いしもべとはいったいだれでしょう。》です。元の聖書が「こういうわけでだれか、忠実で賢いしもべは」から始まっているからです。

あった教会員がいたようです。主イエスが、そうなることを想定され、預言的なたとえを語られたと受け止めるなら、話が見えてまいります。

《忠実で賢いしもべ》ですが、「忠実」

と「賢い」は切り離せません。また、「忠実」と「信仰」は元は同じことばです。ですから「忠実である」といっても、何に対して忠実であるのかをまちがえますと、忠実にはなりません。何に対して忠実なのでしょう。伝えられた教えの規範です。ローマ人への手紙6章17節、18節にあります。《あなたがたは、かつては罪の奴隷でしたが、伝えられた教えの規範に心から服従し、罪から解放されて、義の奴隷となりました。》と。「規範」とは、ひな形のことです。キリストをどのように信じるかという形です。勝手に、自分流に信じたらいけないわけでありまして、そういう意味で「忠実」と「信仰」は同じです。

また、「忠実」と「賢いこと」も関係しています。といいますのは、この後の25章で主イエスは、ともしびを持って花婿を迎えに出る、十人の娘のたとえを語っておられるからです。花婿は再臨のキリスト、十人の娘はキリストの再臨を迎える教会です。十人の娘のうち、五人は愚かで、五人は賢かったとあります。「賢い」娘は、ともしびを燃やし続ける油を絶やしませんでした。「賢い」とは、聖霊によって燃やされ続ける

ことです。それは、キリストの福音をまっすぐに受け止めるところからやっまいります。

二、主のしもべが行うこと

では、忠実で賢いしもべがなすべきは何でしょうか。今一度、45節を見てまいります。《マタイ24・45》 忠実で賢いしもべは、食事ときに食事を与えるしもべです。新共同訳は《時間どおり彼らに食事を与えさせることにした忠実で賢い僕》と訳出しています。聖書協会共同訳は《時に応じて食べ物を与えるようにと、家の用人たちを任された忠実で賢い僕》です。しもべが忠実で賢い者であるなら、第一に何をしなければならぬかが見えてまいります。それは、食事を提供することです。みことばという、神のことばを提供することです。キリストの福音を、時間どおりに、時に応じて提供することです。

それは最初、主イエスがなさったことでしたが、その後は弟子たち自身です。すなわち教会に仕えるしもべがなすべきことです。ご存じのように、主イエスは、五つのパンと二匹の魚から、成人した男子の数で五千人の人々が満腹するまで食べさせられるという、奇跡を行いました。しかし主はこの時、始めからこの奇跡を行おうとされたのではありませんでした。次のように書かれていますからです。マタイの福音書14章15

節、16節です。「あなたがたがあの人たちに食べる物をあげなさい」が、主のおっしゃったことです。

主のしもべがなすべきことは何なのでしょうか。いのちのパンであるキリストの福音を提供することです。これを続けているしもべは、主人が帰ってきた時に、すなわち再臨の時に、ほめられます。46節です。《主人が帰って来たときに、そのようにしているのを見てもらえるしもべは幸いです。》と。こうして

主人は、そのしもべに多くを任せるようになります。ですが、このたとえにおいて主イエスは、「全財産を任せる」と語っておられます。47節です。《まことに、あなたがたに言います。主人はその人に自分の全財産を任せるようになります。》と。

一方、悪いしもべは、言い換えるなら忠実でないしもべ、愚かなしもべは、仲間に食事を与えず、好き勝手なことを行っていると、主はおっしゃいました。そして、悪いしもべはかなり厳しく罰せられると、主はおっしゃいました。48節以降です。《マタイ24・48～51》

ところで、悪いしもべがだれに当てはまるのかと考え、「あの人に当てはまるのではないか」と詮索するのは良くないことです。さばくのは私たちではなく、主だからです。人に対しては、基本的には愛と赦しだけで十分です。